

肝付兼行書翰（史料翻刻）

柴崎 力栄

知的財産学部 知的財産学科
(2014年5月31日受理)

KIMOTSUKI Kaneyuki's Letters

by

Rikiei SHIBASAKI

Department of Intellectual Property, Faculty of Intellectual Property

Abstract

Vice Admiral Kimotsuki Kaneyuki (肝付兼行) is remembered as the founding father of the Hydrographic Department of the Imperial Japanese Navy (IJN). His letters reprinted here consist of two parts. The first 10 letters were addressed to Tsuji Shinji (辻新次), who dedicated himself to forming the educational system of the Meiji era in Japan. The second 8 letters were addressed to Tokutomi Soho (徳富蘇峰), who was a famed journalist at that time with the ownership of an influential magazine and a daily newspaper. This missives offer us an insight in how Kimotsuki gained support and assistance from the outside of the IJN.

キーワード ; 肝付兼行, 辻新次, 徳富蘇峰

Keyword ; Kimotsuki Kaneyuki, Tsuji Shinji, Tokutomi Soho

肝付兼行書翰（史料翻刻）

知的財産学部 知的財産学科

解説

国立国会図書館憲政資料室が撮影したマイクロフィルムおよび寄託を受けた原史料で閲覧に供している辻新次宛肝付兼行書翰全十通と、神奈川県中郡二宮町に所在する徳富蘇峰記念塩崎財団（高野信篤理事長、施設名「徳富蘇峰記念館」）が所蔵する徳富蘇峰宛肝付兼行書翰全八通を翻刻する。発信人の肝付兼行（一八五三年～一九二二年）は、明治時代の海軍軍人で水路部の父と呼ばれる。初代の水路部長である柳権悦を継いで第二代、第四代の水路部長となった⁽¹⁾。

国立国会図書館憲政資料室が閲覧に供している辻新次関係文書は、同室のコレクションの三大分類「憲政資料」「日本占領関係資料」「日系移民関係資料」のうち、近現代の日本の政治家・官僚・軍人などが所蔵していた旧蔵者別コレクション「憲政資料」に属する「辻新次関係文書（MF・個人蔵）」⁽²⁾と「辻新次関係文書（寄託）」⁽³⁾から構成される。前者は國學院大学が撮影したマイクロフィルムから憲政資料室が複製し公開しているもので、フィルム冒頭に「辻家所蔵文書」撮影／國學院大学図書館／昭和四十二年七月」と手書きした文字が撮影されたコマがある。後者は、一九八七年に「個人より寄託」されて閲覧に供されている。受信人の辻新次（一八四二年～一九一五年）は、幕末の洋学者、明治時代の教育行政家で、初代の文部次官を勤めた人物である。辻が創立を提唱し会長となった大日本教育会、および、後に改組した帝国教育会の運営を、肝付は創立時から辻の死去にいたる長期にわたり、幹部役員として助けた。

その辻に宛てた肝付書翰「1.」は、面会可能な日時を尋ねる内容である。一八八三（明治十六）年の大日本教育会の創立以前から肝付と辻の間に交流があったことを示す。官報局刊『職員録 明治十九年 甲』（一八八六年十一月三十日現在の在職者を掲載）以降では肝付の住所は「麹町区下

柴崎力栄

（二〇一四年五月三十一日受理）

二番町五十三番地」となる。本書簡は、それより早い時代、観象主任を務めていた海軍観象台の近隣「飯倉片町廿九番地」に肝付が居住していたことを示す。一八七四（明治七）年に麻布飯倉の高台に完成した海軍観象台は、一八八八（明治二十一年）六月、気象および磁気の観測は内務省に、天象観測は文部省に移管され東京天文台となり、海軍の手を離れた⁽⁴⁾。また、「大伴事肝付兼行」とあるのは、前年の十二月、一八七二（明治五年）の海軍奉職以来用いていた「大伴兼行」から旧来の「肝付兼行」に改姓したことに関わる⁽⁵⁾。

「2.」は、辻が大日本教育会の創設を提唱し、勧誘を受けたことに対しての肝付からの返信である。この年、肝付は、瀬戸内海西部から大村湾の測量のため、長期にわたり出張中であった。呉に鎮守府を設置することが決まったのはこの測量に基づく。『日本水路史』はつぎのように記す⁽⁶⁾。

明治一六年（一八八三） 肝付少佐ほか四名（三浦重郷・高野瀬廉・関各中尉を含めて）は、この年の二月、備後の尾道に着いた。広島県吉奈から山口県由宇にかけての測量（二月～七月）を行ない、五月に東京～広島間の経差電測を実施した。七月にこの一行は二組に分かれ、肝付少佐ほか二名は九州の大村湾を測量（八月～十二月）し、三浦中尉ほか一名は水島水道から九州北岸に至る二〇か所の要地で水雷布設のための測量に従事していた。なお別に加藤中尉ほか四名は前年に続く三崎から尻矢崎までの測量（六月～十一月）に従事したので、この年の海岸線延長距離は実に八七五Mに及ぶものとなった。

軍港地選定 肝付少佐が二月に尾道に着いた。と書き出したのには理由がある。当時鎮守府の候補地として九州では大村湾か伊万里湾（結局佐世保に決まる）、瀬戸内海では尾道三春か呉の地点があげられていた。そのための測量が必要であった。肝付少佐は所見を海軍省に送り呉港は外線として瀬戸内海入口諸水道からは等分の距離にあ

り、内線としては隠戸（音戸）・早瀬・那沙美・大須の瀬戸があり、また倉橋島・東能美島・江田島に囲まれ、艦船の退避と訓練に適した地であるとした。当時少佐の東郷平八郎が第二丁卯艦長として同年この地を視察しているのも偶然ではなかったのである。同年八月から肝付少佐が行なつた大村湾の測量成果とともに、これらが明治二二年、吳および佐世保に鎮守府が置かれる基礎資料となつたものである。

書翰に添えられた漢詩が長期出張の様子を実感をもつて写し取っている。「3.」は、一八八六（明治十九）年五月九日の大日本教育会の常集会における演説に先立ち、辻からの演題の問い合わせに対する肝付の回答である⁽⁷⁾。同演説は、翌一八八七（明治二十）年四月三十日発行『大日本教育会雑誌』五四号に「本邦沿海ノ大勢ヲ知ラシムルノ教科ヲ小学校ニ設クルノ必要ヲ論シ併セテ該書編輯ノ意見ヲ述フ」として掲載された。肝付書翰で「小学」と記されている部分が教育会の機関誌では「小学校」と置き換わっている。

「4.」は、一九〇五（明治三十八）年九月二十三日、海軍中将に昇進したことに關わる。辻からの祝意を表す書翰への返書である。

「5.」は、一九〇八（明治四十一）年十二月十二日、帝国教育会が創立二十五周年記念總會を開催した際、肝付が辻に祝意を表したものである。辻が男爵を授爵し、宮中で爵位奉授式が行なわれたのは、前日、十二月十一日であった⁽⁸⁾。

「6.」は、教育会の集會に欠席がちであることを詫びた書翰である。柿岡町は「茨城県」であるところを「茨木県」と記しているのが「ママ」を付した。

「7.」は、翻訳を進める上での不明点を肝付が辻に問い合わせていたことがわかる書翰である。

「8.」は、肝付の親族の若者の結納であろう。肝付が辻宅を訪問し、懇談可能な日時を問い合わせている。追伸の「添岡君」がだれであるのかは、詰めきれなかった。「赤坂」を「赤阪」と記していたため「ママ」を付した。

「9.」には「スタチック原書」と出てきており、統計学の洋書の翻訳を肝付が試みていることを推測させる。「翻訳書目之御調」ともあり、辻との間で洋書の翻訳について、共同作業を行なう関係であったことが読み

取れる。

「10.」は、会合への出席を伝える短信である。

以上の辻新次宛の肝付兼行書翰には一八八〇年以後のものが残り、日露戦後で終わるのに対して、徳富蘇峰（一八六三年～一九五七年、本名：猪一郎）宛の書翰は、一八九〇年代以降、肝付の最晩年にいたるもので、やや時代が新しい。

「1.」は、国民新聞一八九五（明治二十八）年九月二十七日、二十八日に掲載された肝付へのインタビュー記事⁽⁹⁾を、神戸に所在する一八九一（明治二十四）年創立の海事協会の機関誌『海事雑報』（翌一八九二年一月創刊）へ転載することの許可を求めた書翰である。なお、海事協会は、一八九九（明治三十二）年創設の帝国海事協会（総裁：有栖川宮威仁親王、理事長：有地品之允）に吸収合併されたため、『海事雑報』は帝国海事協会の機関誌として存続することになる⁽¹⁰⁾。

「2.」は、一九〇四（明治三十七）年元旦の年賀状である。辻宛「8.」と同様の理由で「赤阪」の「阪」に「ママ」を付した。

「3.」は、一九〇五（明治三十八）年九月五日、日比谷焼打事件で国民新聞社が襲われた際の見舞状である。

「4.」は、両者が文人としての付き合いをしている側面を窺わせる。注目すべきことに当書翰では「伴鴻生」と署名しており、「7.」でもまた「伴鴻」という号を用いて署名している。従来、人名辞典などでは肝付兼行の号は知られていなかった。二通の徳富蘇峰宛書翰により、号の所在を確認できたことになる。

「5.」は、蘇峰の蔵書『諸葛丞相集』を肝付が借覧していることを示す。同書は、晩年の蘇峰から母校・同志社大学へ寄贈された。同志社大学今出川図書館のOPACを「諸葛丞相集」で検索すると、「配置場所」に「蘇峰・貴重」と表示される。同図書館の特殊文庫「徳富文庫」の一部として排架されていることがわかる。

「6.」は、小包に添えた送り状で、「小生現役に在るの日、部下に使ひしものゝ著述」を、国民新聞の紙上で書評して欲しいと依頼した内容である。一九〇二（明治四十五）年八月末までの国民新聞を通覧したところ、書評が掲載されているのは、同七月十三日一面「東京たより」において、帝国図書館員・太田為三郎著『帝国地名辞典』が紹介されているのが唯一

である。一八六四（元治元）年に生れた太田が、帝国図書館の前身、東京図書館の司書として内閣官報局刊『職員録』に名前が初出するのは、一八九二（明治二十五）年一月一日現在の在職者を示す『職員録 明治二五年甲』においてである。数え年で二十九歳の時である。前歴として肝付の部下として水路部に勤務していた可能性はあるが、『職員録 明治一九年甲』『職員録 明治二十年甲』『職員録 明治二十一年甲』『職員録 明治二十二年甲』『職員録 明治二十三年甲』には、その名を確認することはできない。臨時雇いであって『職員録』に名前が載る立場ではなかった可能性が考えられる。以前、海軍編修書記寺島成信を追跡した際、正式採用以前、海軍参謀部編纂課から「臨時編纂の件を嘱托」され「日給壹円」を給されていた時点では、『職員録』に名前が出ていないことを確認したことがある⁽¹¹⁾。同様の事例であろう。

「7」。肝付の死去は、一九二二（大正十一）年一月十三日であった。大日本水産会の機関誌に掲載された死亡記事によると、「肝付兼行氏は永らく丹毒症に罹られ、爾来麹町区下二番町の自宅に於て療養中の処、先頃来肺炎を併発し去月十三日心臓麻痺を起し遂に薨去せられたり」ということであった⁽¹²⁾。この書翰はその約十か月前に投じられている。そこでは、一九二二（大正十）年二月八日に脳溢血で倒れ、一命は取りとめたものの、死期の近いことを覚悟し、ユーモラスに友人である蘇峰に代筆者を使って最晩年の心境を伝えた内容となっている。

「8」。は、メディア史の史料、新聞配達の実情を示すものとして価値がある。宛名に「民友社にて」とあることから、民友社が発行する三雑誌『国民之友』『家庭雑誌』『欧文極東』を廃刊し、国民新聞へ統合する一八九八（明治三十一年）八月末以前の時代と考えて良いであろう。「民友社運亦益御多祥」という文言から日清戦争中である可能性を思い浮かべることが、確証はない。なお、文脈上「出勤前に読むこと能はざるが如き不快は決して一回だに之れ抱くことなかりしに」とあるべきところを、「か」を欠いて「抱くことなりしに」とあったので、「か」が入るべき個所に「ママ」を付した。

翻刻のスタイルは、かつて共編した『徳富蘇峰関係文書』全三巻（山川出版社近代日本史料選書七・一〇三、一九八二年、一九八五年、一九八七年）を踏襲した。同シリーズ三「凡例」の文言を引用すれば、つぎのよ

うになる。「復刻に当つては、なるべく原形を尊重した。但し、適宜句読点・濁点を付し、片かな・変体かなは原則として平がなに統一した。明らかな誤字等は傍註で示し、誤用慣用は史料通りとした。また字体は原則的に新字を使用した。」「推定差出年月日には（ ）を付した。」「書簡の様態については、巻紙・墨書以外のもののみ註記した。」

辻新次宛肝付兼行書翰（国立国会図書館憲政資料室辻新次関係文書）

1. 明治（13）年5月20日

時下愈御清穆御奉職奉欣躍候。其後は絶て御不音に打過多罪々々。扱近頃少々得拜眉度件有之候て参面仕度候へ共、差付罷在候ては御不在も計り難く存候に付一応御在館之御都合伺候。両三日之内何時頃参面仕候へば御都合悪からず候哉。甚恐縮之到に御坐候へ共、別紙端書葉を以て御答被下度奉願候。頓首

五月廿日

肝付兼行

辻新次様侍史

「註」辻新次関係文書（MF・個人蔵）、五番目に撮影。封筒表、府下本郷区弓町二丁目拾八番地、辻新次様侍史、飯倉片町廿九番地、大伴事肝付兼行。封筒裏、第五月廿日投函。差出年は消印による。

2. 明治（16）年10月29日

去月廿七日付の芳墨此頃当地に在て拝読。先以て時下愈御清穆奉欣賀候。小生春來芸備地方より当州之間奔走、今尚帰期を不相定。尤も本年中には無相違帰京之積りに御坐候。来文之教育会頗嘉挙と存候に付、即入会可仕候間、宜敷御取計被下度、会費之義は帰京次第差出可申候。先は御答迄、時下折角御愛護為國家奉祈念候。勿々不備

十月廿九日

肝付兼行拝

辻賢台侍史

事業の実況を述べたため悪詩二首を一察に博す。御一覽後御投炎を祈る。

測了芸防猶未還

西征又到大村湾

山成複嶺層巒起

水汰千湾百港彎

鉅島龍蜻懸海口

駛潮雷響溢門関

細心欲測斯真景

日統肥州西岸山

○

怒涛險岳又何惶

登岳凌涛則我常

水枕猩々篷底夢

猶攀累險続羊腸

乍甚略儀不取敢御礼迄如此に御座候也。

九月二十五日

兼行拝

辻老台座下

〔註〕辻新次関係文書（MF…個人蔵）二番目に撮影。封筒なし。

5. 明治41年12月（12）日

明治四十一年十二月、帝国教育会創立満二十五年の紀念總會挙行の当日、
辻会長の君への勲功に依り特に男爵を授り給ひしお礼ひまゐらせたる

海軍中将 正四位 勳二等 男爵肝付兼行

老てこのをしへにはに ほまれなれ

世にあらはれし きみがいさを慰々

〔註〕辻新次関係文書（MF…個人蔵）、三番目に撮影。封筒なし。

6. （）年4月28日

拜復 其後は公私の多忙に取紛れ教育会の為めには義務を欠き恐縮此事
に御座候。五月一日の御招きには是非共都合仕り、出席仕る心得に候間、
其儀御承知被下度候也。

四月二十八日

肝付兼行

辻新次殿

本日は先々断り切れず茨木〔マツ〕県柿岡町へ参り昨夜十時帰京の都合に御

坐候。

〔註〕辻新次関係文書（MF…個人蔵）、四番目に撮影。封筒なし。

坐候。

7. （）年6月23日

拜啓 愈御清穆奉欣躍候。扱甚五月蠅御迫り申上如何とも恐縮之次第に御
坐候へ共、過日一寸以書面相伺置候翻訳ものゝ事は未だ何れとも御分り不
相成候哉、甚乍略儀重て以書面相伺候。頓首

六月廿三日

肝付兼行

辻賢台吾下

本邦沿海ノ大勢ヲ知ラシムルノ教科ヲ小学ニ設クルノ必要ヲ論シ併

セテ該書編輯ノ意見ヲ述フ

〔註〕辻新次関係文書（寄託）七六一三。封筒なし。

4. 明治（38）年9月25日

拜啓 本月二日小生の昇任に対し早速之御歓問を添し芳情深く奉感謝候。

辻新次様侍史

〔註〕辻新次関係文書（MF…個人蔵）六番目に撮影。封筒なし。

8.（）年7月21日

拝啓 例の結納の交換は本日が良日とのことにつき即ち本日を以て為相
濟候。式場は赤阪（M.V.）の金勘、当夜及其後の滞在中は自宅に引取りて可然哉
とのことに有之、就ては御相談申上度儀も有之、明後廿三日御近辺へ出る
の序でを以て午后四時乃至五時頃参邸可仕候間、何卒全時御在宅被下度奉
願候也。

七月二十一日

兼行

辻老台座下

追て添岡君の尋は廿三日の御会谈後に願度候也。

〔註〕辻新次関係文書（寄託）七六一。封筒なし。

9.（）年9月30日

其後は御不音に打過多罪々々。時下愈御清穆に被為涉大慶不過之奉欣躍候。
扱来る三日御近辺迄用向有之候て罷越候因に付彼のスタチツク原書頂戴
旁参館可仕候間、若し御不在なるも相訳り候様執事之衆へ御申聞置被下度
奉願候。又彼翻訳書目之御調は未だ御調済に相成不申哉、此儀并せて奉伺
度如此に御坐候。勿々不備

九月卅日

肝付兼行拝

辻新次様侍史

〔註〕辻新次関係文書（MF…個人蔵）、一番目に撮影。封筒なし。

10.（）年11月27日

拝復 来三十日御案内之趣敬承、即ち全日は必ず参席可仕心得に御座候間、
此段御報申上候也。

十一月二十七日

肝付兼行拝

辻男爵閣下

〔註〕辻新次関係文書（寄託）七六一。封筒なし。

徳富蘇峰宛肝付兼行書翰（徳富蘇峰記念塩崎財団所蔵）

1. 明治（28）年10月4日

本日、神戸なる海事協会より、過日貴新紙上に出たる所の小生の談話に係
る「海国教育」上下の両章、該雑報へ転載方依頼越、承諾致候条、此段御
承知相成度候也。

十月四日夜

〔註〕官製葉書。表書、京橋区日吉町民友社御中、下二番町五三、肝付
兼行、「回答済」と蘇峰の墨書。差出年は消印による。

2. 明治37年1月1日

恭賀新年

三十七年一月一日

〔註〕官製葉書。表書、赤阪区青山南町、徳富猪一郎殿、朱印「東京麹
町区下二番町\五十三番地\肝付兼行」。

3. 明治（38）年9月5日

拝啓 本日国民新聞社に対する暴漢等の挙動を伝聞して音ならず驚嘆致
したることに御座候。尊兄には固より何等の御被害も之れなかりしことと
存候へ共、社会の為め国家の為め大切之御身、乍蔭閣下畜ならず何卒御保
護專一に被下度候。堂々たる青天の御心事は、其内に暴漢等にも自から会
得するの時は来るべし。先は本日尊兄の御身体に何等の御被害無かりしを
喜ふと全時に国民新聞社に対し御見舞の微衷を表し度如此に御座候也。

九月五日夕

兼行拝

徳富学兄座下

〔註〕封筒表、市内赤坂区青山南町六の三〇、徳富猪一郎殿、直訴。封

筒裏、九月五日夕、朱印「東京麹町区下二番町〱五十三番地〱肝付兼行」。差出年は消印による。

4. 明治（45）年3月31日

拝啓 乍突然疇昔は甚落付かざる即吟を差出し今更汗顔之至りに御座候。右は左の如く改正致候に付、御一笑被下度候也。

始皇が居たなら

此書にや

蓋し

侯爵ばらには

惜むよに

三月末日

伴鴻生拝

徳富学兄座下

〔註〕封筒表、市内赤坂区青山南町六丁目三十、徳富猪一郎殿、直訴。

封筒裏、三月三十一日、朱印「東京麹町区下二番町〱五十三番地〱肝付兼行」。差出年は消印による。

5. 明治（45）年6月20日

拝啓 愈御清案奉欣賀候。陳ば一昨夜借覧相願ひし諸葛丞相集、当方より使之者可差出ところ、却て奉煩郵送何共恐縮之至り、今朝右落手に際し不取敢謝芳志度如此に御座候也。

六月廿日

兼行拝

蘇峰学兄座下

〔註〕封筒表、赤坂区青山南町六の三〇、徳富猪一郎殿、直披。封筒裏、六月二十日、朱印「東京麹町区下二番町〱五十三番地〱肝付兼行」。差出年は消印による。

6. 明治（45）年7月7日

拝啓 愈御清安奉欣賀候。陳ば別書は尊覧に入るべき程のもの無之候へ共、小生現役に在るの日、部下に使ひしもの、著述に有之、万々奉煩劉覽候こ

とを得て、国民新紙上に尊兄の御批評にても得ることあらむ乎、本人幸甚何ものか之に過ぎむ。即ち右の微意にて奉送呈候もの、宜敷御笑納被下度候也。

七月七日

兼行拝

蘇峰学兄座下

諸葛丞相集は於本邦実には難得の珍書、写し取置き度不少、何卒今暫く返上之儀御猶予被下度奉願候也。

〔註〕封筒表、赤坂区青山南町六の三十、徳富猪一郎殿、別冊（小包）

副。封筒裏、七月七日、朱印「東京麹町区下二番町〱五十三番地〱肝付兼行」。差出年は消印による。

7. 大正10年3月2日

拝啓 老生儀去る二月八日脳溢血にてたをれ候へども、幸にして今尚命を存せり。然し彼岸も近づきたる事なれば、浄土への旅立も遠からざるべきか。

うひのたびとて航空機がほしい

せめて九品の浄土まで

人世如夢なる四言の真味は今回はを味ふて心底に徹せり。いさゝか実験を吐露して尊大の御自愛を捧る。

大正十年三月二日

肝付伴鴻佐筆

徳富蘇峰大兄座下

〔註〕封筒表、市内京橋区新橋日吉町、国民新聞社、徳富蘇峰大兄座下。朱印「速達」。封筒裏、印刷「東京市麹町区下二番町五十三番地〱男爵肝付兼行〱電話九段三三四番〱大正 年 月 日」。印刷された年月日枠に墨書で「十三 三 二」と記入し「大正十年三月二日」としてある。文中に「佐筆」と記されている通り当書翰は代筆によるもので、筆跡も肝付とは異なる。

8. 明治（ ）年2月23日

拝啓 時下愈御清安民友社運亦益御多祥為公私欣喜実に此事に御座候。偕

国民新聞之儀、従来長く夜中に配達ありし御勉強の結果、遂に出勤前に読むこと能はざるが如き不快は決して一回だに之れ抱くことなりしに、先月来は如何なる訳か、或は早く或は遅く、屢々出勤前に読むこと能はざるの遅達に遭遇するのみならず、去三日の如き、一、二、三、四ページの一枚のみ。又去る十五日及今廿三日の如き、全く配達無之、思ふに此事たる小生のみなれば敢て貴兄に告ぐるの要なきも、若し他所にも有之候には、甚だ民友社に宜しからずと愚考せらる。依て不平を鳴らす儀には決して無之候へ共、何卒自今配達者を厳しく詰責せられて右様之義無之様御取計相成度候。為民友社深く希望仕候也。

二月二十三日

肝付兼行

徳富蘇峰学兄座下

「註」封筒表、京橋区日吉町四番地民友社にて、徳富猪一郎殿、親展。

封筒裏、二月二十三日午後二時投函、朱印「東京麹町区下二番町／五十三番地／肝付兼行」、「スム」と蘇峰の墨書。

脚註

- (1) 柴崎力栄「海軍の広報を担当した肝付兼行」(大阪工業大学紀要 人文社会篇第五卷第二号、二〇一一年二月) 参照。
- (2) <http://rnavi.ndl.go.jp/kensei/entry/tsujishim.j1.php> 国立国会図書館ホームページ内「辻新次関係文書(MF:個人蔵)」について説明のページ。
- (3) <http://rnavi.ndl.go.jp/kensei/entry/tsujishim.j12.php> 同「辻新次関係文書(寄託)」について説明のページ。
- (4) 海上保安庁水路部編『日本水路史 一八七〇～一九七二』(日本水路協会、一九七一年) 第一編「草創期(明治四年～明治二〇年)」第三章「観象台業務事情」。
- (5) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. C09113398400 明治二二年公文類纂前編卷三七 本省公文 人別部三「大伴大尉改姓の件水路局届他一件」(防衛省防衛研究所)。同 Ref. C09101586600 公

- (6) 文原書卷三 本省公文 明治二二年一月一四日～明治二二年一月一六日「大伴大尉改姓の義太政官届」(同)。
- (7) 前掲『日本水路史 一八七〇～一九七二』三九～四〇頁。
- (8) 読売新聞一八八六(明治十九)年五月七日二面「大日本教育会」、同五月十二日三面「大日本教育会」。
- (9) 読売新聞一九〇八(明治四十一)年十二月十三日二面「辻新次氏へ授爵」、同「帝国教育会総会」。
- (10) 国民新聞一八九五(明治二十八)年九月二十七日三面「海国教育(一)海軍大佐肝付兼行氏の談 水上生」、同九月二十八日三面「海国教育(下)海軍大佐肝付兼行氏の談 水上生」。「(一)」と「(下)」は紙面における表記のまま。
- (11) 海軍協会の創立と機関誌発行については、『日本海軍協会七五年史』(財団法人日本海軍協会、一九七六年) 十三頁参照。
- (12) 柴崎力栄「仮装巡洋艦を提唱した寺島成信」(大阪工業大学紀要 人文社会篇第五卷第一号、二〇一〇年十月) 三〇頁において紹介した寺島の自筆履歴書と、一八八九(明治二十二)年十二月十日現在の在職者を掲載する『職員録 明治二十二年甲』を対比して得た結論。
- (13) 『水産界』四七三号、一九二二年。

